



令和6年度 第19回八頭町部落解放研究集会

「へこたれへん ~人はきっとつながれる~」



みえ人権教育・啓発研究会 代表 松村 智広 さん

『まちぐるみで部落差別をはじめあらゆる差別の解消に取り組もう』を主題に、第19回八頭町部落解放研究集会を12月1日(日)に開催しました。講演会には、オンライン視聴を含めて約170名が参加。講師の松村智広さんは、数々の体験談を交えながら、時にはユーモアたっぷりに、そして熱い思いで語られ、私たちがどう考えて行動すべきなのか、そのヒントが端々に散りばめられていました。講演内容の一部を紹介します。

タクシー運転手の優しさ

私は、変形性股関節症を患っているため、外出時は杖が欠かせません。ある雨の日、講演会場まで近い距離でしたが、荷物が多いことから、タクシーを利用しました。しかし、体が動かしづらく、降りるのに手間取っていると、そのタクシー運転手が覗みつけて、「おい、こんな近い距離くらい。これからはタクシーに乗るな」と言ったのです。

翌日、今度は奈良県に行きました。すると、そのタクシー運転手は、目が合うとすぐに駆け寄ってきて親切に対応してくれ、わざわざ講演会場まで荷物も運んでくれました。帰りも同じタクシー会社に頼みましたが、別の運転手も丁寧な対応でした。なぜこんなにも違うのか？答えは2つありました。

1つは、そのタクシー会社が、相手の立場に立って物事を考えられるように、接客を含めた企業研修をしっかりとやっていたことです。もう1つは、会場に向かう道中に沢山あったのぼり旗です。そこに書いてあったのは、「差別をなくす学習から、差別をなくす行動へ 毎月11日は人権を確かめよう日」という言葉でした。実は、奈良県では毎月11日を「人権を確かめよう日」としています。同和対策審議会答申が出された「1965(昭

和40)年8月11日」の記念と、11を横にすると「11(イコール)」、平等という2つの意味が含まれています。人間の体は、知らず知らずのうちに習慣化されます。のぼり旗を見ながら、「人のことを考えないといけない」と、空気を吸うように体の中に入っていたのではないだろうか。たかがのぼり旗、されどこのぼり旗。世論づくりや雰囲気づくりは大切なんだと思います。

知識と認識 共感と実感

私は、中学校の教員をしていました。最後に着任した学校には、毎朝遅刻してくる子どもがいました。その現状だけを捉えれば、「だらしのない子だな」と思うかもしれません。

しかし、よく話を聞くと、その子はひとり親家庭で、母には重度の障がいがあり、夜中の2時まで内職をしていたことがわかりました。生きるため、生活





をするためにです。それが見えてきたら、子どもの捉え方、声かけが変わってきます。みんな同じようなカバンを持っていますが、カバンの中身やそれぞれの生活は一人一人違います。見ようとしなければ見えてきません。そして、私の見る目が変わらなければ、単なる「遅刻する子」で終わっていたかもしれません。人を見る目が変わればお互いが変わると、子どもと向き合って教えてもらいました。

知識があれば偏見に気づけますが、認識がなければその偏見は是正できません。認識というのは、しんどい生活をしている人がいる、人権侵害を受けている人がいるという目の前の事実を、社会の現実として率直に受け止めることです。その共感力がなければ認識とは言えません。共感力は、人との出会いや交流によって培われていくものだと思います。人によって実感はバラバラかもしれません。しかし、実態は事実なのです。

「部落差別問題」

私自身、結婚差別を受けた経験があります。最近でも、知人の親戚が差別を受けて別れさせられました。三重県の意識調査では、回答者の28%が被差別部落出身者の家族との結婚を避けたいと回答しています。

また、昨年には三重県内の学校の

教員による土地差別も起きました。購入した土地が被差別部落の中にあると後からわかり、不動産会社に対して「なぜ言わなかったのか」と批判し、契約を解除したということです。不動産会社が、自治体に相談をして発覚しました。三重県の意識調査では、回答者の34%が被差別部落内に居住することを避けたいと回答しており、この件は氷山の一角だと言えます。差別を許さない教育を行うべき立場の教員が、そのような差別意識を持ったまま教壇に立って、一体どんな教育を子どもたちにするのでしょう。普段は差別に無関心であっても、利害関係が生じると差別をする側に引き寄せられやすくなります。

過去、自分自身が差別をされたとき、差別を恨んでも、ふるさとを憎むんじゃないかと、今なら思います。個人の問題ではなく社会の問題なのです。差別をされる人が問題なのではなく、差別をする人が問題なのが問題なのだから、部落問題というよりは「部落差別問題」です。部落解放と言いますが、差別という目に見えない鎖で縛られている人こそが、解放されるべきです。

1人では何にもできないかもしれませんが、1人からしか何もできません。1人が動けば、小さな勇気が社会を変える大きな原動力になります。

その他、多くの心に残る言葉をいただきました。松村さん、ありがとうございました。

人権啓発とは、「あの人たちのためにやっている、やってあげている」じゃなくて、自分自身の内面を覗く鏡を持つ時間だと思う。

差別発言や差別事象に共通する2つのことがある。当事者の顔が見えていない、浮かんでいないことと、その言葉が人を傷つけるという認識がないこと。

いじめにあったら一人で闘わず、まずは逃げて命を守る。そして、チームで立ち向かうこと。

いつか終わるとわかっているからやれる。差別だってきつとなくせるといふ展望も大事。

自分の愚かさに気がついたときが、人権感覚が高まったとき



〈参考〉令和5年度八頭町人権問題に関する町民意識調査では、居住地を考える際に、近くに被差別部落があれば避けたいと思うと回答した割合は、11.2%でした。